

## 『正法眼蔵』「現成公案」の説示について

石井義長

道元禪師は天童如浄のもとで一生参学の大事を終え、弘法救生を思いとして帰国し建仁寺に入った二八歳の安貞元年（一二二七）に、まず『普勸坐禅儀』を撰述して直指端的の正道を勧めている。四年後の寛喜三年（一二三二）に深草に移つてからは、七月に「了然道者に示されたる法語」を書き、八月には「弁道話」を記し、さらに翌々天福元年（一二三三）

ものである。しかしその反面、これを難解とする見方は多く、「謎のようなテキスト（松本史朗『道元思想論』）」という見解もある。その謎を解き明かして本来の平明な真実を見出す鍵を、入宋学道の記録である『宝慶記』や、事前に書かれていた「了然道者に示されたる法語」「摩訶般若波羅蜜」等の中に、発見することができないであろうか。

### 一 「現成公案」頭初の三段の説示

の夏安居日には、はじめて『正法眼蔵』「摩訶般若波羅蜜」を観音導利院に示衆し、解夏の翌八月に、鎮西の俗弟子楊光秀に「現成公案」を書いて与えた。それは詮慧の『御聞書』が、「第一の見成公案にて、第七十五の出家までをなじ義をのぶる也」というように、古来「御一代の仏法はこの一卷で尽きる（西有穆山『啓迪』）」と評価されるものである。

現成公案という言葉については諸家にさまざまな議論があるが、ここでは道元が興聖寺での上堂において、「作麼生是見成公案。便是十方諸仏古今諸祖是矣、而今現成、諸人見麼」と示し、「山僧今日、不惜性命、不惜眉毛、為諸人再説、為諸人重説」と述べていることだけを確認しておきたい。

「現成公案」は、晩年の道元の意味によって七五巻本の首巻とされているが、その成立からみて本来、道元の仏道の要諦をもっとも平易に表現したもので、坐禅弁道を強調する「弁道話」に対して、仏法の根本真理を懇切に説示しようとした

この巻のはじめには、まず次の三段の説示がなされている。①諸法の仏法なる時節、すなはち迷悟あり修行あり、生あり死あり、諸仏あり衆生あり。

②万法ともにわれにあらざる時節、まどひなくさととりなく、諸仏なく衆生なく、生なく滅なし。

③仏道もとより豊儉より跳出せるゆゑに、生滅あり、迷悟あり、生仏あり。

ここでは「諸法実相」という仏法の真理が、①の有・②の無・③の非有非無(空)という正・反・合の三段で示されており、それぞれが仏法の真理でありつつ、③の非有非無(空)の悟りを得て完結しようという、仏法の根本・般若波羅蜜(完全なる智慧)が端的に説示されている。西有穆山もこの③について、「有無を超越し、有無を自由に使う般若波羅蜜である〔啓迪〕」と解している。

## 二 天童如浄からうけた般若・空の悟り

『宝慶記』は、道元が天童山で如浄に面授した南宋宝慶元年(一二二五)五月一日から、翌年末に如浄が天童山を退院するまでの間の『入宋求法ノート(池田魯参)』とされる。その第三二条には、師の「風鈴頌」にある「渾身似<sub>レ</sub>口掛<sub>二</sub>虚空<sub>一</sub>」「一等爲<sub>レ</sub>他談<sub>二</sub>般若<sub>一</sub>」の二句に関する道元の質問に答えた、如浄の次の言葉が記録されている。

堂頭和尚慈誨云、謂<sub>二</sub>虚空<sub>一</sub>者般若也、非<sub>二</sub>虚空色之虚空<sub>一</sub>。謂<sub>二</sub>虚空<sub>一</sub>者、非<sub>二</sub>有礙<sub>一</sub>也、非<sub>二</sub>無礙<sub>一</sub>也。所以非<sub>二</sub>單空之空<sub>一</sub>、非<sub>二</sub>偏真之真<sub>一</sub>。

これを聞いた道元は、「歡喜踊躍、感涙濕<sub>レ</sub>衣、晝夜叩頭而

頂戴也」と、異例な感激を示している。

自己の渾身は空なる世界にあり、自他は一等に般若に生かされており、それは有にあらざる無にあらざる実相である。如浄によってこのような般若の智慧を確証された道元の感激は、まず『正法眼蔵』最初の示衆であった「摩訶般若波羅蜜」の中に結実している。そこでは如浄の「風鈴頌」を、「これ仏祖嫡嫡の談般若なり」として、「般若波羅蜜多は是諸法なり。この諸法は空相なり、不生不滅なり」と、「現成公案」の三段にそのまま対応する説示を行っている。如浄のいう「有礙」は「摩訶般若波羅蜜」の「是諸法」であり、「現成公案」の①の時節に当る。同じく「無礙」は「空相」であり、②の時節に当る。また「非有礙也、非無礙也」は「不生不滅」であり、③の豊儉跳出の時節にまさしく相当している。そしてこのような「風鈴頌」の悟りに由来する道元の確信は、さらに『正法眼蔵』「見仏」「諸法実相」「虚空」の各巻にも明らかに見うけられ、それは道元における仏法の根本的な領解となっていたと考えられる。

## 三 了然道者に示されたる法語

静岡県の可睡齋に所蔵される「了然道者に示されたる法語」は、奥書に「辛卯孟秋住安養院 道元示」とあり、「現成公案」の二年前の七月に、深草の安養院で道元が記したものである

が、同文が『道元和尚広録』第八の「法語」一二に収められている。そこでは、『景德伝灯録』に載る法眼文益の清涼寺上堂法語の中に、「欲知<sup>レ</sup>仏性義<sup>一</sup>当<sup>レ</sup>觀<sup>レ</sup>時節因縁。但守<sup>レ</sup>分隨<sup>レ</sup>時過<sup>サバ</sup>好<sup>シ</sup>」とあり、その際に「色作<sup>レ</sup>非色解<sup>一</sup>」と「非色中作<sup>レ</sup>色解<sup>一</sup>」、および「両頭走」の三見がいましめられていることを受けて、次のように了然道者に示されている。

如何是隨時及節、如何是守分。可<sup>レ</sup>知、於<sup>レ</sup>色上<sup>一</sup>莫<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>非色解<sup>一</sup>、亦不<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>色解<sup>一</sup>、亦不<sup>レ</sup>走<sup>レ</sup>両頭<sup>一</sup>。如今忘<sup>レ</sup>嫌疑<sup>一</sup>、與<sup>レ</sup>他古仏<sup>一</sup>同住同行<sup>セン</sup>。

仏性を悟る上には、時節に随い分を守ることが必要と法眼は説いているが、どうすればいいのか。諸法の色を非色（無）と解し、また色は有であると解し、さらに両方に解することとすべきでない。古仏を信じて、同じ修行を積もうではないか。ここで述べられている「非色解」「色解」が、翌々年に書かれた「現成公案」の①と②に逆転して相応し、「不走両頭」は同じく③の豊儉より逆に跳出ししないことへのいましめである。この説示と「現成公案」には共通に、如浄の「風鈴頌」の教えが生かされていることは明白である。

#### 四 花は愛惜にちり、草は棄嫌におふるのみなり

「現成公案」の先の③に続く文章は、次のとおりである。

④ しかもかくのごとくなりといへども、花は愛惜にちり、草

は棄嫌におふるのみなり。

この段は、多く前記の③の段と一体的に解釈されている。従って③が「生滅あり、迷悟あり」と諸法を肯定しているのに対して、「しかもかくのごとくなりといへども」という否定を想定させる連接辞が異和感を与える故か、蔵海の『私記』をはじめ西有穆山の『啓迪』、岸沢惟安の『全講』などはこれを「しかもかくのごとくなれば」と、反対に解釈してこれを道元の「語勢」としている。

しかしこの段は、前の①②③の正・反・合それぞれの仏法の眞実をふまえた上で、あらためて「活きた現成公案（安谷白雲『正法眼蔵参究』）」としての諸法実相を示しているものであり、字義どおりに「しかもかくのごとくなりといへども」と受けとめるべきで、それが道元の眞意に違いない。

したがって、『天聖広灯録』に載る牛頭精の語からとられた次の「花は愛惜にちり、草は棄嫌におふるのみなり」の言葉は、仏道はあらゆる物事を有・無・有無超越の実相として受けとめるものであるが、「それにもかかわらず、そのようなものであるといっても、花は惜しいと思う中で散り、草は嫌だと思いうちにも生えるだけである」と説いていることになる。この言葉の外には、花を愛惜し、草を棄嫌する人間としての自然な情念が認められ、しかもその情念に執着するところは少しもないという、道元の透徹した心がうかがわれる。そのよ

うな心は、後年の永平寺での「山居」の頌の中に、『法華經』を読んで「專精樹下何憎愛」といいつつ、「妬矣ネタマシキカナ 秋深夜雨、声」と歎じ、また「蝨キガギリス 思虫、声何切切ツツ」と詠んでいる清冽な詩情にも、はつきりと示されている。

これこそ「活きた現成公案」の時節であり、また「応無所住而生其心」の世界とっていいのではなからうか。さらに、釈尊が臨終の地をめざす最後の旅の途次、アーナンダに対して「ヴェーサーリーは楽しい」とくり返していたことも想起される。それは生死の究極的な肯定であり、それが「ただ生死すなはち涅槃とこころえて」「いとふことなく、したふことなき（生死）」、仏道の世界であろう。

## 五 方法すすみて自己を修証するはさとりなり

「現成公案」の④に続く説示は、次のごとくである。

⑤ 自己をはこびて方法を修証するを迷とす、方法すすみて自己を修証するはさとりなり。

愛憎と迷いの自己をそのままにして方法を修証しようとしても、迷いから抜け出せない。道元は「了然道者に示されたる法語」の中で、『遺教經』の仏説をうけて、次のように説いている。

十二時中对諸万像、但取其味、莫壞色香。如何是不壞色香底道理。向備道、稟他万縁印、被他方法証。須悉是不壞色

『正法眼蔵』「現成公案」の説示について（石井）

香之時節也。

「万法に証せらるる」とは、諸法に対してただその味・万縁の印をうけて、その色香を壊さない、それは『遺教經』に、蜂が花の蜜を吸いとっても、花の色香を損じないと説かれていたのと同じだという。それが「方法すすみて自己を修証する（諸法の実相に印証されることによって、自己と諸法が一体不二のものとなる）」ということの、例証とされている。この悟りの眼目は、「現成公案」ではこのすこし後に「自己をわする」という言葉の中で、より明快に説示される。

## 六 かがみに影をやどすがごとくにあらす

「現成公案」は⑤の段の後半で、

⑥ 諸仏のまさしく諸仏なるときは、自己は諸仏なりと覚知することをもちゐず。しかあれども証仏なり、仏を証してもてゆく。

と説いている。この「諸仏」という言葉の意味は、水野弥穂子氏が「道元禪師は『諸仏』という言葉で、仏道修行して仏になつてゐる人のことを言っておられます（『正法眼蔵』を読む人のために）」と述べているとおりであろう。これに続く説示は次のとおり。

⑦ 身心を擧して色を見取し・声を聴取するに、したしく会取すれども、かがみに影をやどすがごとくにあらす、水と月

『正法眼蔵』「現成公案」の説示について（石井）

一八八

のごとくにあらず。一方を証するときには一方はくらし。さきに三に挙げた「了然道者に示されたる法語」の末尾には、続いて次のような教えが説かれている。

與<sup>二</sup>他古仏<sup>一</sup>同住同行。雖<sup>レ</sup>然、爭<sup>レ</sup>猶<sup>二</sup>三面鏡相對<sup>一</sup>。

古仏と同住同行して修行を積むについても、どうして顔と鏡が向き合って相対するような関係で、それが実現できようか。つまり、迷いの自己をそのままにした、鏡が物の影を映してその形を再現するような二物對待の会取では、仏性は見えず、「一方を証するときは一方はくらし」のままである。自他不二の実相として、方法を証得することはできない。

### 七 仏道をならふといふは、自己をわするるなり

それ故にこそ続けて、次のように、もつともよく知られた仏道の要諦が見事な論理で説き明かされる。

⑧ 仏道をならふといふは、自己をならふ也。自己をならふといふは、自己をわするるなり。自己をわするるといふは、

万法に証せらるるなり。万法に証せらるるといふは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり。

自己をわするる中で、おのずから自己は万法に証せられ、自己は一体として身心脱落し、ともに洞然明白である。

『宝慶記』は、如浄の道元に対する「身心脱落」の教えと

して、次の言葉を記録している。

身心脱落者、坐禪也。祇管坐禪時、离<sup>二</sup>五欲<sup>一</sup>、除<sup>二</sup>五蓋<sup>一</sup>也。

先除<sup>二</sup>五蓋<sup>一</sup>、後除<sup>二</sup>六蓋<sup>一</sup>也。五蓋加<sup>二</sup>無明蓋<sup>一</sup>爲<sup>二</sup>六蓋<sup>一</sup>也。

五蓋雖<sup>レ</sup>离、無明蓋未<sup>レ</sup>离、未<sup>レ</sup>到<sup>二</sup>仏祖修証<sup>一</sup>也。

これらの言葉は如浄の教えとしての、「自己をわするる」時節とその内実を示している。

そして、道元における「身心脱落」の全体像は、如浄の「風鈴頌」によって領解され、「現成公案」において説かれた「有・無・非有非無」の般若のさとりによる、「除無明蓋」によってまず支えられており、只管打坐の仏行によってこれが不動の確証に現実化され、自受用三昧の法門として現成されたものといえよう。その意味で「現成公案」の説示は、道元がみずからの仏道の根源を支える、般若波羅蜜・「色即是空、空即是色」の真理が我々の生きる世界のすべてに現前成就しているという確信を、道俗を超えた弘法救生の教えとして、もつとも端的な表現によって「不惜性命、爲人再説、爲人重説」したものであった。

〈キーワード〉 道元、『正法眼蔵』、現成公案、『宝慶記』、了然道者に示されたる法語

（東洋大学大学院修了・文博）